

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2008年7月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.17 「サービスの点検を」

塾業界のセミナーシーズンも終え、各塾では夏期講習の準備に忙しいことでしょう。塾業界では様々なセミナーが開催されますが、積極的に参加されることをお勧めします。

多くのセミナーが「いわゆるセールス・セミナー」であることは充分に承知しています。一般のビジネス・セミナーに比べ受講費用も格段に安いのですが（多くの場合は無料）、それだけに「わざわざ売り込みされに行くのもなあ…」という気持ちも解ります。しかし、それでも参加する価値はあると思います。

ただ、私は無料セミナーは嫌いです。学生時代の苦い経験があるのです。当時、コンサートを企画するイベント会社でバイトしていたのですが、チケットの売れ行きが芳しくない、我々に「無料チケット」が配られます。「誰でもいいからコンサートにサクラを連れて来い」という指令です。何人もの友人に「彼女と一緒に来てくれ」と2枚セットの無料チケットを配って回ったものです。頭を下げて…。

すると、コンサート当日、汗だくになって場内整理をしている私の横を「おい、来てやったぞ!」という顔で友人カップル（表現が古い?）が何組も通り過ぎていきます。そう、無料にすると、『主催者側が頼み込んで集客をしなければならぬ』という逆転現象が起こります。

私も、塾団体のセミナーに招かれることがあります。そうした時には必ずと言っていいほど「来てやったぞ」風の参加者が、数人、紛れ込んでいます。講演者としては実にやりにくいものです。そして何より、そんな参加者は、セミナーに参加しても何も得るものがありません。いわゆるアンテナが立っていないからです。ことは塾の現場でも起こっています。

そう、「テスト対策補習」です。どの塾でもテスト前の休日を利用してテスト対策授業を行います。塾長（教室長）は普段の学習態度が不真面目な塾生に声を掛けます。

「いいな、今日の日曜日は必ず補習に参加するんだぞ!何度も休んだり、宿題を忘れてたりして遅れているのだから。」

ところが、そんな生徒に限って補習を休みます。すると、塾長は怒ります。

「なぜ、来なかった!」

その心の裏には、「私が休みを返上してわざわざ補習をしてやっているのに、どうして休むのか!」という思いがあるはず。その生徒にしてみれば、「やりたくない補習を押し付けられて、嫌だから休んだら怒られる」という二重の理不尽を感じているものです。また、嫌々参加

しても学習効果が上がらないことは目に見えています。どちらにしても不毛の結果しか期待できません。

私は、無料であっても「申込書」を提出させ、意欲のある塾生を中心として指導すべきだと考えています。かつて、「熱心な塾ほど成績不振者が集まる（真面目な生徒が退塾する）」という話をしたことがあります。上記の例ばかりでなく、熱心な塾長ほど「不真面目な生徒」に過剰サービスをしてしまいます。

あなたの塾でも「居残り」「呼び出し」「補習」の対象者は、休みがちで宿題をよく忘れる生徒中心になっていないでしょうか。

『この生徒を私の力で改心させ、矯正してみせる…』

その精神は尊いと思うのですが、そんな「あなた」を真面目な生徒はどう見ているでしょう。

「この塾は真面目な私より、休みがちで宿題もやってこない不真面目な生徒に熱心だ。ここは私のための塾ではない。」

そう考えて黙って退塾していきます。そんな塾の先生に限って、「成績優秀者に来て欲しいです。彼等は手が掛かりませんから…。」と言います。そして、言葉通り成績優秀者に手を掛けずにいるので、結果、手の掛かる成績不振者だけが集まる塾になっているという悪循環に陥っているのです。

「成績優秀者が集まらない」と悩んでいる塾経営者は、一度、指導（サービス）内容を点検してみたいかがでしょう。

余談ですが、先日、ある経済研究所主催のセミナーに聴衆として参加してきました。講師はテレビによく登場する自民党の代議士です。主催者は著名な経済学者ですが、この学者さんの振る舞いにビックリしました。何と、講演中、講師が話している前を堂々と横切っていくのです。また、講演後の質疑応答で、聴衆のひとり、名古屋大学の経済学教授が指名されたのですが、座ったまま（質問ではなく）自説を朗々と述べていました。他の質問者は立ち上がり、講演のお礼を述べた後に質問しているのに…です。あらためて「学者」の礼儀知らずに啞然としたものです。

これも以前、「塾の常識は世間の非常識」というテーマでお話したことがあるのですが、塾講師は周りから先生と呼ばれ、「客」から中元をもらう特殊な職種です。それだけに往々にして高慢な態度になりがちです。自戒を込めてご報告します。お互い、気を付けましょうね。

さあ、夏期講習。暑い夏をより熱く!

今月の気になるハナシ

アクティブ・ラーニング

実験を通して、論理的な思考力を育てる授業があります。

1. 埼玉県川口市の小学校の授業風景

生徒が教師の周りに集合し、真剣に実験手順に注目している。

教師が二つの集気ビンに、それぞれ二酸化炭素と酸素で満たし、ガラス板でフタをする。次に酸素のビンを逆さまにし、二酸化炭素のビンの口に重ね、ガラス板を静かに引き抜く。

「二酸化炭素を入れたビンの中で、ロウソクの火はもえるのか」

教師の問いに対し、生徒は一斉に結果を予想してノートに書き込む。指名されると、「もえると思います。二酸化炭素も酸素があればもえるから」、「もえないと思います。ビンの中をまぜていないから」と次々に自分なりの根拠をつけた予想を答えていく。

予想が出そろったところで、討論が始まる。

「なぜ、まざらないと思うのか」「二酸化炭素は酸素より重いから」「それなら地面の小さな生き物は死んでしまうはず」「風で空気が動いているから大丈夫・・・」討論を通して、自分の考えを整理させ、最終予想をノートにまとめる。

「では、やってみよう」

教師が、ロウソクの火をビンの中に入れて、火は消えることなくもえつづけると、生徒は自分の予想と結果の差を目の前で実感する。実験結果を書き、生徒が発表すると、最後に教師が「かきまぜなくても、まざる。それが気体の性質です」と授業をまとめた。

2. 濃密な授業

生徒は、何度も考え、まとめ、書き、発表を繰り返します。濃密な45分間は、あっという間に過ぎてしまいます。こうした授業法は『アクティブ・ラーニング』と呼ばれ、現在は大学にも広がっています。

実験を見せて「なぜ」を問うのではなく、実験が『どうなるか』を徹底して考える——それが、知識の確実な定着につながります。

3. 考えることの大切さ

ただ結論を予想するのではなく、根拠をつけて予想するには、過去の学習内容や実生活から得た知識など、さまざまな情報を総動員して考え

るしかありません。そして自分の考えを実際に書くことで、頭の中が整理され、討論によって、ほかの意見を知り、迷いや確信を得ます。最後には、実験の結果によって、生徒全員が、「気体は、まざり合う」(今回の実験では)という知識に、自然に到達します。

今回の新学習指導要領において、理科では、論理的な思考力の育成と、学習内容の系統性が強調されています。

「順序立てて思考を進めると、小6でも次に『なぜ気体は自然に混ざってしまうの?』という疑問に行き着く。今覚える必要がなくても、子どもが知りたい時に回答を用意することは、学習の積み重ねと系統性で大事なことです」と冒頭の実験を行った教師。

授業は、科学者の新発見が「仮説、考察、論争、検証」と経ると、同じ順序をたどってもいます。知を発展させる人間の営みが、思考力を育てる子どもの授業のヒントになっています。

[アクティブ・ラーニング]

能動的学習や参加型学習と訳される。教師が知識を説明し、生徒が受け身になる学習ではなく、生徒の自発的で論理的な思考や討論などを通して、分析や意思決定をしたり、正解にたどりついていく学習。欧米の大学で注目され、東京大学などが授業モデルの研究や実践を進めている。

雑感

今回紹介した実験を行いながら、授業を進めるスタイルは、塾向きではないかもしれません。

ですが今回のポイントは、「なんだろう」と考えることが、思考力をみがき、「なるほど」と納得することが、知識の定着につながるという点です。教室の掲示物を使って、考えるクセをつけることはできるかもしれません。子どもでも大人でも、なぜならクイズが好きなのは多いはず。なぜならクイズは、「なぜだろう」と考え、答えに「なるほど」と納得する——今回のアクティブ・ラーニングと同様の展開です。

教室の入り口に、理系のクイズを掲示してみたいかがでしょう。考えるクセをつけるきっかけになるかもしれません。